

内野手経験による投手のフィールディング技術および傷害の関係

保田 恭兵 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 秋武 寛

キーワード：投手，フィールディング，傷害

1. 緒言

投手は優れた投球能力が求められ、内野手では捕球能力、敏捷な動き、正確な送球などが求められる(河井と澤田 2016)。また、野球の投球動作に問題が生じると、これを修正するために肩関節や肘関節に過度のストレスがかかり、傷害を引き起こす(丸山ら, 2004)という報告がされている。

そこで、本研究では、1) 内野手経験が豊富な投手と豊富でない投手に分け、フィールディング局面における習熟度を検討すること、2) 投手の時期別の傷害発生の要因を様々な視点から調査し、投手全体の傷害傾向を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

フィールディング技能に関する実験は、板谷と渡部(2017)によって試案された送球技能テストを用いて、メインポジションとして3年以上内野手経験を積んだ投手9名を内野群、それ以外の投手9名を非内野群とに分けた(身長 178.0±7.8 cm, 体重 74.4±6.2 kg, 競技歴 11.8±1.8 年)。傷害に関しては、アンケート調査を行った。統計処理は、フィールディング分析が Pearson の積率相関係数、アンケート調査による傷害が、クロス集計分析を行った。

3. 結果と考察

フィールディング技能に、内野群と非内野群との間ですべての項目に有意差は認められなかった。これは、内野群の内野手経験よ

り投手経験が上回っている選手が 9 人中 7 人(77.7%)であったために、内野手経験が反映されず、群間差が生まれなかったと推察される。

傷害調査では、時期別の傷害既往の有無と時期別の競技歴をクロス集計した結果、中学生期にのみ、有意な関係が認められた($\chi^2=4.701$, $df=1$, $p<0.05$)。これは、中学生期は、軟式野球と硬式野球に分かれる分岐点であり、軟式の場合は体にかかる負担が少ないので毎日でも練習できる(新井, 1994)という報告から、ボールの違いから軟式野球よりも硬式野球の方に傷害発生が多い結果となった。そのため、身体が順応するまで出来るだけ多くの時間を費やすべきだと考える。

4. まとめ

本研究の内野手経験が豊富な投手と豊富でない投手でのフィールディング技能の習熟度においては、差が認められなかった。傷害調査においては、中学生期にのみ有意な関係が認められた。

引用・参考文献

- 新井勇治(1994)最新少年野球指導論. ベースボールクリニック 5 (9) : 18-21.
板谷厚 渡部嘉紀(2017年)野球内野手に送球技能パフォーマンステスト. 北海道教育大学紀要, 自然科学編 67 (2) : 43-51.